

# B-64 腕の動きに伴った袖の形について (第1報)

帝塚山学院短大

南日 朋子  
金集 悦子  
萩原 朋子  
岩尾千賀子

1. 袖の大きさや形を定めるのに、腕を下げた時の静的な形態はもとより、動的な変化をも考慮に入れて行なわなければならないのは当然である。また、これらを検討するのに、袖だけにとらわれず、身頃のゆるみにも及ばなければならないことはいうまでもない。そこでこれらを客観的に把握するために、次のような実験を行なった。

2. 袖の形は、もっとも普遍的であるセット・イン・スリーブを選び、身頃の袖付寸法を基準として、そのゆるみによる変化と共に、山の高さに変化を求めた。身頃のゆるみは、腕の動きに最も関係の深い、背幅と腕つけ根にしぼった。これら要因の他に、腕の運動として、運動の方向、角度の2要因を加え、4元配置の計画表のもとに、被服圧計を用いて実験を行ない、身体との適合性を検討した。尚、衣服作製にあてた試料は、体型の動きが見え、しかも伸縮性の少ない、東レのテترون#9000を用いた。

3. 今回は、袖付け回り線上の、前腕つけね・後腕つけね・肩峰点の3か所について報告する。衣服圧はこの3か所とも、運動の方向による差が認められたが、殊に、後腕つけね・肩峰点では腕を挙げた時の角度による差と共に、1%の危険率で認められた。交互作用においても、山の高さと腕の角度、腕の方向と角度において、3か所ともその差が認められた。